研究ノート

社会科学の方法と科学哲学

伊藤　光利

Methodology of Social Science and Philosophy of Science

Mitsutoshi ITO

Abstract

This research note is intended to examine the methodology of social science, its philosophical basis —ontology and epistemology—, and related research issues. Scholars in political studies barely have referred to these issues in Japan, probably because they have been little conscious of them, so they have borrowed methodological ideas from natural science, and they have been heavily affected by American political science which positivism has dominated. Then this note aims to fill this vacant space in political studies of Japan. Lastly, it quates a meaningful sentence stated by Furlong and Marsh “that all researchers should identify and acknowledge their epistemological and ontological underpinnings and how these affect their research design and research methods and, most importantly, the claims they make on the base of what their research reveals “.

はじめに

本研究ノートは、社会科学、とくに政治学の方法とその科学哲学的基礎、すなわち存在論と認識論およびそれに関連するリーサーチの諸問題を検討する。筆者の専門領域である政治学において、わが国ではその科学哲学的基礎について論じられることはほとんどなかった。政治研究は、無意識にせよ、実証主義的に行われることが多かったといえよう。その理由としては、政治研究の科学哲学的基礎への自覚の乏しさ、それと関連して自然科学的方法による代用、そして実証主義が支配的なアメリカ政治学の影響などが考えられよう。

しかし、近年、社会科学の方法論に関する著作を公刊した野村康は、その１章で社会科学の科学哲学的基礎を論じている（野村 2017: 第１章）。また彼は、「イギリス（ないしヨーロッパ）

の 社会科学は、アメリカほど実証主義の勢力が強くなく、批判的実在論や解釈主義に基づく研究も大きな影響力を持って」いることを指摘している（野村 2017：5；同書の「はじめに」および「おわりに」をも参照）。彼が紹介し、また主に参照・引用している文献の一部として、ファーロング／マーシュ（Furlong and Marsh 2010）、グリックス（Grix 2010）、ブレイキー（Blaikie 2000/2010）、ブレイキー（Blaikie 2007）の 4 点を挙げることができる。

前の 2 点は政治学者によるものであり、後の 2 点は メルボルン大学教授などを歴任した社会学者によるものである。ブレイキーは社会学のみならず、社会科学一般について論じている。この 4 点とも学部学生および大学院生向けの版を重ねている定評ある教科書（ファーロング／マーシュの著作は、教科書の 1 章として書かれている、）であることを考えると、イギリス（ないしヨーロッパ）そしてオーストラリアなどでは、実証主義にとどまらない社会科学の哲学的基礎を自覚した研究が重視されていることが知られる。筆者自身、十数年前に、オックスフォード大学・政治科学ハンドブック・シリーズの 1 巻『文脈的政治分析』（Goodwin and Tilly eds. 2006）の「第 2 部　哲学的関連」に C. ヘイ（C. Hay）による「政治的存在論」の 1 章があるのを見て、「あるべきものがある」という感慨を抱いたことを記憶している。

本ノートは、わが国の社会科学一般そしてとくに政治学における以上のような認識を背景にして、記述が進められる。その際、記述の多くが上の 4 つの著作（ブレイキーの 2 点 についてはいずれもその第 2 版 2007, 2010）に多くを負っていることをあらかじめお断りしておきたい。

以下、第 1 節で、社会科学研究においてその哲学的な基礎が占める位置を理解するために、社会科学における研究の遂行をコントロールするリサーチ・デザインを概略する。第 2 節では、社会科学の哲学的基礎という観点から、実証主義、解釈主義、実在論など、社会的世界を理解するための哲学的および理論的伝統であるリサーチ・パラダイム（あるいは理論的パースペクティヴ）を検討する。

1. リサーチ・デザイン

リサーチ・デザインは「何が」「どのように」研究されるかについての広範な選択と決定を含む作業文書であるが、より具体的には、プロジェクトに着手する前に、プロジェクト遂行にあたり必要のある（選択）決定を組み込み、これらの決定がなぜなされたかを詳細に説明し、それらの決定が互いに矛盾しないで一貫すること、そして批判的な評価に対して許容的であること、を確実にするためのプランである。リサーチデザインがこれらの要件を満たすならば、リサーチの遂行を首尾よく制御できる機会を高めることになる（Blaikie2010:12-16）。

図 1 は、リサーチデザインの諸要素を関連づけたものであり、各要素は 選択肢の中からの選択を含む。また各要素のうち本稿の主要な関心から、リサーチ戦略、存在論および認識論、リサーチ・パラダイムの 3 要素に焦点を合わせ、他の要素は簡略に扱うかあるいは省略する。以下、この図 1 に沿って説明を加えていきたい（おもに Blaikie 2010: Ch1. 参照）。

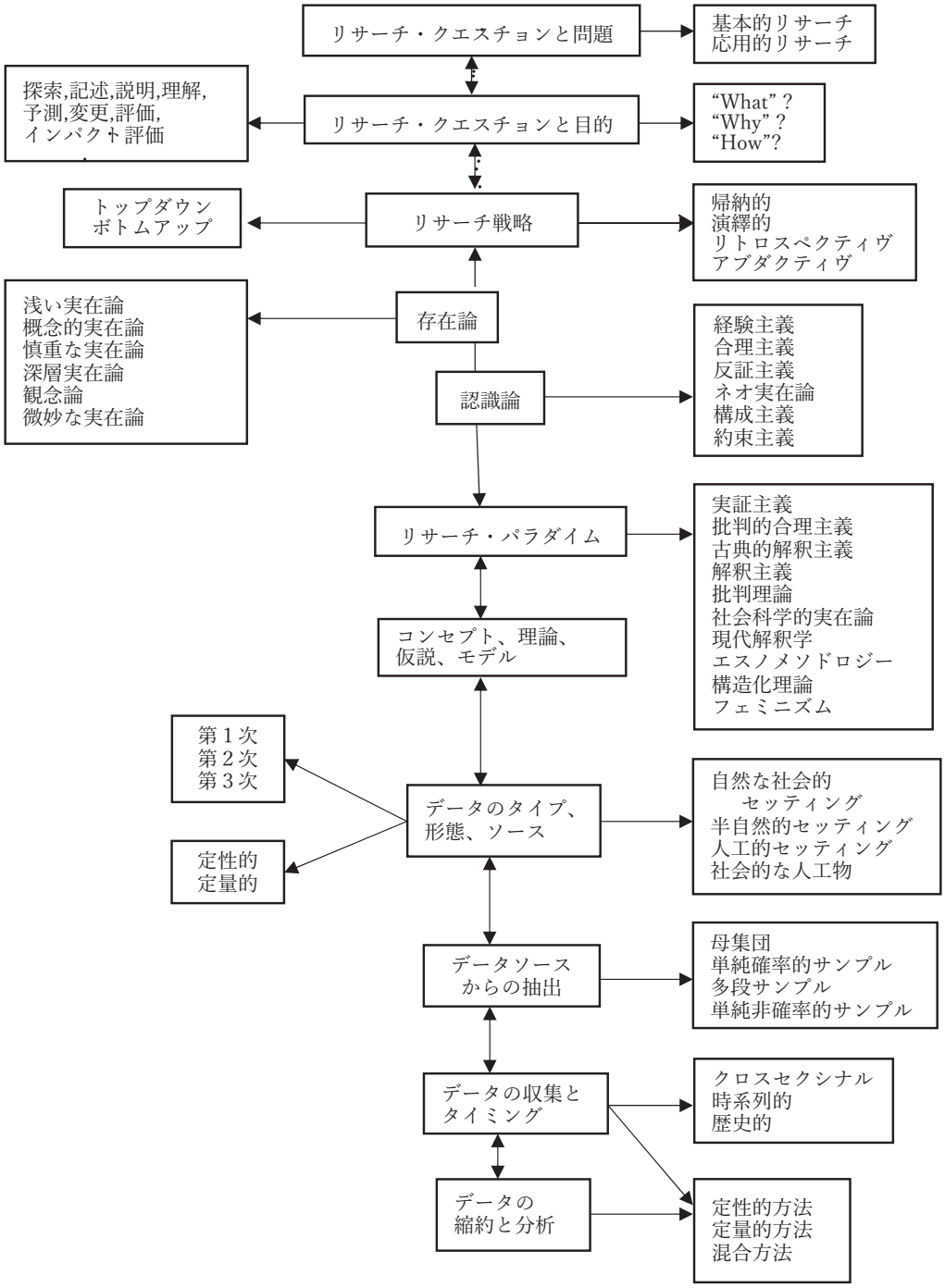

図１　社会的リサーチ・デザインの諸要素

Blaikie（2010）: 33 より.

1.1. リサーチ問題とリサーチ・クエスチョン

リサーチ問題（problem）は研究者が探求したい知的なパズルである。問題の言明は、何が研究されるかについての手がかりと、領域を確定するための境界線の両方を提供する。しかし、リサーチが可能であるためには、リサーチ問題は１個かそれ以上のリサーチ・クエスチョンに転換されなければならない（Blaikie 2007:6）。

リサーチ・クエスチョン（以下、簡略化のためにRQ（s）と表記）は、リサーチ問題を、研究が答えるべきパズルの形に転換したものである。したがってRQ（s）は、リサーチ問題と重なる機能を持つが、研究 プロジェクトの遂行のより明確な道標となる。RQ（s）を 確定することによって、① リサーチの焦点と方向性の選択が可能になる、② リサーチの境界が明確になる、③ リサーチの管理・制御の可能性が高まる、さらに④ リサーチ戦略とデータ 収集と分析の方法の選択が可能になる、かくして⑤リサーチが首尾よく完了するまでのプランを描ける、などが期待を高めることができる。このように、RQ（s）の 設定は、リサーチ・デザインの最も決定的な構成要素であり、「リサーチ・プロジェクトはRQ（s）の 基礎の上に構築される」のである（Blaikie 2010:57-58）。

RQ（s）は、「what（何が、）？」、「why（なぜ）？」、「how（どのように）?」という 3つの主要なタイプを持つ。「what Q（s）」は、記述的な答えを要求する。これらの問いは、何らかの社会現象の特徴とその現象におけるパターンを記述することに向けられる。「why Q（s）」は、特定の現象の特徴と規則性の存在の原因あるいは理由を問う。それらは、事象の間の関係、あるいは社会活動とプロセスにおける諸関係の理解あるいは説明を追求する。「how Q（s）」は、変化の始まり、［例えば、政策的］介入および実際の帰結［すなわち、事象がどのように変化し始めるのか、どのように 介入すればどのように帰結が生じるか］に関わる（Blaikie 2007:7）。

1.2. リサーチの目的

リサーチ目的は研究者が生み出したいと考える知識のタイプに関わる。リサーチは、探索、記述、説明、理解、予測、変化（変更）、評価、インパクト評価など、比較的単純なものからきわめて複雑なものまで、そして基礎的なリサーチに関わるものから応用的なリサーチに関わるものまで、多くの目的を持つ。基礎的なリサーチは最初の５つの目的に、そして応用的リサーチは残りの３つの目的に関わる。本稿は、このうち基礎的リサーチに焦点を合わせる（以下、Blaikie 2010:69-73を参照）。

探索的リサーチは、本質的に、リサーチ・トピックに関連して現在何が進行しているか、リサーチがどのようになされる可能性があるか、についてのより良いアイディアを得るために使用される。トピックが 以前にほとんど調査されなかったか、あるいはある特定の文脈では調査されなかった場合には探索的リサーチが必要であろう。リサーチの有意性、あるいはデータ収集のある方法の実現可能性なども探索する必要があるかもしれない。

記述的リサーチは、何らかの事象――何らかのデモグラフィックなカテゴリー、集団、人々とかの 特徴、特定時点での何らかの社会的文脈における関係パターン あるいは一定のタイム・

スパンにおけるそれらの特徴の変化――の正確な説明（account）を提示しようとする（Bulmer 1986:66）。実際、探索的リサーチと記述的リサーチの境界は曖昧であるが，後者はより厳密でまた普通その焦点はより狭い。この２つのリサーチのタイプはともにコンセプトの利用を必要とし、それらは少なくともいくつかの理論的前提によって組織化される必要がある。

説明的（explanatory）リサーチは、観察された社会的現象、態度、行動、社会的関係、社会的プロセス、あるいは社会的構造におけるパターンを説明しよう（account）とする（Bulmer 1986:66-7）。説明は、観察された、および既存の理論では説明できないでき事や規則性の理解を可能にする。詳細な記述は最初の説明を提供できる。何人かの著者は、以下のように「説明と理解」を区別している（Taylor 1964 ほか）。両者の違いは、どのように理解可能性（intelligibility）が達成されるのか［理解が可能になるのか］の問題、すなわち 因果的な説明によるのか、それとも理由による説明によるのか、の違いである。

説明は、出来事あるいは規則性の原因、それらを生み出す要因あるいはメカニズムを同定するのに対して、理解は社会的アクターがその行為に対して与える理由あるいは説明（account）によって提供される。後者は、特定の社会的文脈におけるでき事とか活動の意味と関連している。また説明は、「外部」からある現象を見る研究者によって生成されるのに対して、理解は、「内部」の見解――研究者が捉えた、その行為に含まれる社会的行為者の主観的な意識・解釈――に基づいている（Giddens 1976:55）。

説明と理解について、何人かの著者は、因果的説明は自然科学で適切であるのに対して、理由の説明は人間科学あるいは社会科学で適切であると、論じるが、他の著者は、両方とも社会科学で利用することができる、と論じる。後者の立場は、説明も理解も共に社会科学において適切な目的であるが、それらはかなり異なる種類の理解可能性を生む、というものである。

自然科学と社会科学のいずれにおいても、説明あるいは理解するために、異なる仮定と異なる調査ロジックに基づく多様な戦略が唱導されてきた。これらの戦略（ブレイキーは、「リサーチ戦略」と呼ぶ）は、異なる場（place）で、また異なる要因とかメカニズムの観点から、RQ（s）に対する答えを探す。これらうちの３つ（帰納的、演繹的、リトロスペクティブ）が説明のために使用される戦略であり、ひとつ（アブダクティブ）が理解を達成するために使用される戦略である。

リサーチにおける予測（prediction）は、もし一定の法則とかメカニズムが一定の条件のもとで作用したら何が起こるかに関して主張する。予測は２つの仕方で達成されうる。つまり、（帰納的リサーチ戦略におけるように）コンセプトの間の連関のよく確立したパターンの点から予測されるケースと、（演繹的リサーチ戦略におけるように）理論的主張における強調をシフトすることによって予測されるケースである。確立したパターンのケースでは、関係の一部分が存在するときはいつでも他の部分もまた存在するだろうということが期待しうる。後者の予測のケースに関しては、何人かの著者は、説明と予測に含まれるロジックは本質的に同じだと論じてきた。それは、たんに強調がどこに置かれるか、何が［現実と理論のいずれが／伊藤注］所与と考えられるかという問題にすぎない（Popper 1959, 1961, Hempel 1966）。この主張は、

観察されたパターンの説明として使用された命題のセットは、他のパターンを予測するのに利用されることができるという仮定に基づいている。

リトロスペティヴ（retrospective）・リサーチ戦略を唱導した著者たち（例えば、Bhaskar 1979）は、予測は閉じられたシステムにおいて（おそらく実験的な条件において）のみ可能である、と論じた。彼らによれば、社会科学者は、開放的システムで研究しなければならないので、その帰結として社会科学においては予測は可能ではない。彼らは、自然科学もまた開放システムで作動するので――人為的にコントロールされた事象は別として――予測は可能でないと主張する（Blaikie 2010: 72-73）。

1.3. リサーチ戦略

つぎにリサーチ戦略をあらためて簡単に説明する（以下 Blaikie 2007:8-10; Blaikie 2010: 18-19 参照）。リサーチをデザインする上での重要な仕事は、RQ（s）にどのように答えるかを決定することである。必要なことは、新しい知識を生むための手続きとロジックであり、すなわち「リサーチ戦略」である。リサーチ戦略は、RQ（s），とくに「what」Q（s）と「why」Q（s）に応えるためのロジック , あるいはワンセットの手続きを提供する。それゆえ、帰納的、演繹的、リトロスペクティヴ、アブダクティヴ（abductive）の 4 つのリサーチ戦略の選択およびその組み合わせはリサーチのデザインにおいてきわめて重要な決定を構成する。

帰納的リサーチ戦略は、データの収集から出発し、次にデータ分析へと続き、それからいわゆる帰納的ロジックを使用して一般化を引き出すことに進む。その狙いは、人々と社会の状況の諸特徴を記述すること、そしてこれらの特徴の間の関係のパターンあるいは関係のネットワークの特質を同定することである。何人かの著者は、いったん特徴あるいはパターンについての一般化が確定されると、特定のでき事をその確定したパターン内部に位置づけることによって、でき事を説明するためにその一般化が利用されると主張する。このリサーチ戦略は、「what」Q（s）答えるのに有用であるが、「why」Q（s）に満足に応える能力の点ではきわめて限られている。

演繹的リサーチ戦略は、帰納的戦略とはまったく異なる出発点から、逆の順序で機能する。つまり既に発見され、確定された、そして説明を求めるパターンあるいは規則性から出発する。研究者は、研究対象である社会現象における規則性に対する可能な説明・理論的主張を発見し、あるいは定式化しなければならない。その仕事は、理論から 1 個か複数の仮説を演繹することによってその理論をテストすること、そしてそのための適切なデータを集めることである。データがその理論に適合するならば、その理論を使用することに対する何らかの支持が与えられる。しかしながら、もしデータがその理論に適合しなければ、その理論は修正されるか拒否されねばならない。その場合、他の候補となる理論のテストが企てられる。このリサーチ・デザインに従えば、社会的世界の知識は試行錯誤のプロセスによって前進される。ただし、このリサーチ・デザインは、「why」Q（s）に応えるために適切であるにすぎない。

リトロスペクティヴ・リサーチ戦略もまた観察された規則性から出発するが、異なるタイプ

の説明を追求する。これは、ひとつの観察される規則性を生み出す原因である現実の基礎にある構造あるいはメカニズムを突き止めることによって達成される。しかし、構造あるいはメカニズムは直接的には観察できないので、間接的な方法を必要とするかもしれない。構造あるいはメカニズムの探求は、その存在の帰結の証拠を求めることになる。もしそれが存在すれば、一定のでき事が生起することが期待できる。リトロスペクティヴ戦略は、創造的な想像力とアナロジーを利用することによって、データから説明へと遡行する（work back）プロセスである。このリサーチ戦略は、「why」Q（s）に答える代替的な方法を提供する。ブレイキーの見解では、リトロスペクティヴ戦略には、説明を社会アクターの外部にある社会構造に位置づけるバージョン（構造主義的見解）と、行動に対する認知的なメカニズムと社会的に構築されたルールに焦点を当てる（社会構成主義）の２つのバージョンがある。

アブダクティヴ・リサーチ戦略は、ブレイキーによれば、他の３つとはきわめて異なるロジックを持つ。ただし、ブレイキーによるアブダクティブ戦略論は、後述のより一般的なアブダクション（アブダクティブ・ アプローチ）の コアである仮説形成的特徴を解釈主義的立場から独自に展開させたものと考えられるので、これを割愛し、より一般的なアブダクションについて述べておくのが有意義であろう。

なお、ブレイキーによると、リサーチ戦略は、その研究ロジックが相矛盾するように構成されてきたが、それらは、連鎖的に使用されるとか、あるリサーチ戦略がもう一つのリサーチ戦略の一部として 組み入れられるなどの形で、実際組み合わせることが可能である。

1.4. 仮説形成法としてのアブダクション

アブダクションの研究者である米盛裕二（2007/2019）に依拠して述べていくと、チャールズ・パース（Charles. S. Peirce, 1939-1914）は、科学的論理的思考の方法として、演繹と帰納の２種類に加えて、アブダクション（abduction）または リトロダクション（retroduction）を 提示した。米盛によると、推論とはいくつかの前提（既知のもの）からある結論（未知のもの）を導き出す思考過程のことであり、そして推論は、推論の前提がその結論を根拠づける論証力（必然的か蓋然的か）の違いによって、一般には演繹と帰納の２種類にわけられる。

「演繹が経験から独立に成り立つ形式的必然的推論であるのに対し、一方、帰納は経験に基づく 蓋然的な推論です。つまり帰納は限られた経験に基づいて一般的言明を行う推論であり、その一般化推論（部分から全体へ、特殊から普遍への一般化理論）によって、帰納は経験的知識の拡張をもたらしますが、しかしそのかわり、経験的反証にさらされていますので、蓋然的推論にとどまざるをえません」（米盛　2019：1-3）。

パースは、演繹の論理学や帰納の論理学とは違う、アブダクションを主題にした新しい論理学である「探求の論理学」を提示する。「探求という科学的行為は、・・・ 発見を行い、新しい知識を獲得する、そういう重要な成果をあげるために、つまり知識を拡張するために行われます」。しかし「「拡張的」機能において優れた推論ほど、逆に、可謬性の高い、論証力の弱い推論になります」。さらに、演繹、帰納的、アブダクションの３種類の推論について、次のよう

に比較される。「演繹は論証力において最も優れた推論ですが、しかし拡張的機能をもちません。アブダクションは論証力においては他の推論に比べて劣りますが、しかし拡張的機能においては最も優れた推論です。そして帰納は、論証力と拡張的機能の両面において、いわば演繹とアブダクションの中間にあります」（米盛 2019: 5-13）。

「仮説形成法」あるいは「仮説的推論」とも訳されるアブダクションとは具体的にはいかなるものかを見てみよう。科学的探求は一般性の探求である。ニュートンによる万有引力の法則の発見の場合を考えてみると、「質量は互いに引力を及ぼし合うという一般法則」は、諸物体は支えられていないときには落下するという事実の観察から、一般化によって確立されたものである。例えば、ある仕方で木を擦ると火を起こすことができるというのは、個々の経験から一般化によって導かれた知識であり、それは帰納的一般化の例である。しかしこれは万有引力という一般法則にいたる一般化とはまったく異なる。「引力」という働き（質量は互いに引力を及ぼし合うという作用）は 直接には観察不可能なものである。物体の落下の現象をいかに綿密に繰り返し観察してみてもその中に「引力」というものを見ることができない。万有引力の法則の発見は、直接観察した事実から、それらの事実とは違う種類の、しかも直接には観察不可能な「引力」という作用を想定する仮説的な思惟による発見である。万有引力の法則は観察事実から帰納的一般化によって導かれたものではなく、観察事実を説明するために創案され発明されたものである。諸物体の落下の現象をどれだけ周到に観察し一般化してみても、創造的想像力、仮説的思惟の働かないところでは、直接には観察不可能な「引力」という理論的仮説的対象というものを考えつくことはできないであろう。アインシュタインの言葉を借りると、「経験をいくら集めても理論は生まれない」のである。W・ニールは 万有引力の方法の発見は「仮説的方法」によるものであるという（米盛 2019: 36-9）。

次にケプラーの発見を見てみよう。ケプラーは惑星が一定の仕方で運動することに 関する 3 法則―― そのひとつは惑星は太陽を 1 つの焦点とする楕円軌道上を運動するという法則――を発見した。それは、観察事実を総括する一般的定式化を帰納的に導き出したものではなく、優れた仮説的思惟によるものであった。当時、円運動は惑星という概念に絶対的であったが、ケプラーはブラーエの観察データを説明する仮説を求めて、繰り返し観察データーに戻り、何度も仮説を立て直しながら、ついに楕円軌道の仮説に思いいたった。パースは、このケプラーの発見を最も素晴らしいリトロダクションと呼んだ。リトロダクションという言葉は「遡及推論」を意味している。それは 結果から原因への遡及推論であり、あるいは観察データからその観察データを説明しうると考えられる法則や理論への遡及推論を意味している。ケプラーは観察結果に合うような惑星の運動とはどういうものでなくてはならないか、というふうに遡及推論を行ったのである（米盛 209: 41-4）。

なお、パースは、リトロダクションをアブダクションの別名としており、両者を区別していない。両者とも仮説形成法でくくることができ、その意味で同種のものとみなしていたと思われる。ただ、リトロダクションの遡及推論の側面を強調するためか、アブダクションとは区別する研究者もいる。

米盛は、続けて「科学的想像力を支える推論」について論じている。C.・ヘンペルは、「データから理論に至るには創造的想像力が必要である。科学的仮説や理論は、観察された事実から導かれるのではなく、観察された事実を説明するために発明されるものである」（Hempl; 1966: 15）と述べ、アインシュタインもまた「物理の基礎概念へと導いてくれる帰納的な方法などは存在しない」と述べる。しかし両者とも他にどんな方法があるのかということについては何も述べていない。ヘンペルは 科学的発見は幸運な偶然の思いつきやひらめきによるものと考えているようである。K・ポパーは「すべての発見は＜非合理的要素＞、あるいはベルクソン的な意味における＜ 創造的直感＞ 含んでいる」と述べている。しかしながら科学的発見は非合理的な行為であり、運まかせの所為である、ということにはならないであろう。パースは、仮説を形成するということは、つまり正しい仮説を形成しようという明確な意図のもとに行われる「意識的で、熟慮的で、自発的で、かつ統制された行為」であるとして、アブダクションによる仮説の形成は２つの段階を踏まえて行われていると考えている。つまりアブダクションは最初にいろいろな仮説を思いつく示唆的（洞察的）段階と、その中から最も正しいと思われる仮説を選ぶ 塾考的な推論の段階から成り立っている。米盛は、その著書でパースによりながらアブダクションについて詳細に展開している（米盛 2019: 45-50）。

リサーチ戦略は、存在論および認識論に対する 異なるアプローチ（ブレーキは「リサーチ・パラダイム」と呼ぶ）、すなわち実証主義、解釈主義的 および実在論的アプローチといった理論的あるいは哲学的パースペクティブのより広い枠組みの中に位置づけられる。次節ではこれらのアプローチ（パラダイム）を吟味する。

2. 政治学における存在論と認識論

ファーロングとマーシュ（Furlong and Marsh 2010）は、政治学における存在論（ontology）と認識論（epistemology）に関する章「皮膚であって、セーターではない：政治学における存在論と認識論」を著わしている。それに依拠して述べていくと、「政治学の研究者はすべて、彼ら自身の存在論的および認識論的立場を認識すべきであり、それらを擁護することができなければならない」。それらの立場はわれわれのアプローチを形作るので、研究者はその時の適合感で着たり脱いだりできるものではない（Furlong and Marsh 2010 : 184）。

2.1. 存在論と認識論の意味

存在論は「存在（being）」に関する理論であり、キィとなる存在論的問いは、現実（reality）の形態と本質（nature）は何か、である。換言すれば、「現実の」世界はわれわれの認識から独立した外部に（out there）存在するのかどうかである。後に見るように、命名法は変化するけれども、２つの広い存在論的立場がある。ひとつは、われわれの認識から独立した外部に「現実の」世界を措定する基礎づけ主義 / 客観主義 / 実在論であり、もうひとつは、世界を社会的に構成されたものとして見る反基礎づけ / 構成主義 / 相対主義である。

つぎに認識論は、文字通り認識（knowledge）に関する理論である。認識論に関連して２つのキィとなる問いがある。ひとつは、観察者は社会現象間の「現実の」あるいは「客観的な」関係を同定することができるだろうか、である。基礎づけ論者は、そのような関係を同定できるという立場にとるのに対して、反基礎づけ主義者は、われわれが存在すると信じていない外部世界に関する独立した知識の能力（capacity）を論じることは非論理的である、という解釈主義的な立場をとる。同時に、そのような反基礎づけ主義はまた、いかなる観察者も「客観的」ではありえないということを示唆する。なぜなら彼／彼女は、社会的な世界に生きており、社会的世界の「現実」についての社会的構築物によって影響を受けているからである。このことはときにいわゆる「二重の解釈」と呼ばれるものを喚起する。すなわち世界はアクターによって解釈され（第１の解釈的なレベル）、そのアクターの解釈は観察者によって解釈される（第２の解釈のレベル）のである（Furlong and Marsh 2010 :184-5）。

第２の問いは、もうひとつの重要なそして明確に関連するイシュウを提起する。すなわち、われわれが社会的現象の間の「現実の」関係を確定することができる程度にまで、これを「直接の観察」を通してすることができるのか、それとも直接に観察できない何らかの関係があるのか、という問いである。これらの問いに対して人々が与える答えは、その人の認識論的立場を形成し、どのように人が因果性や説明という概念を理解するのかを形成する。それゆえ、われわれのここでの議論は、存在論と認識論は関連しているというものである。基礎づけ主義的存在論は、実証主義的あるいは実在論的な認識論に導き、他方で反基礎づけ主義的な存在論は解釈主義的な認識論に結びつく。さらに、人の認識論的立場は明らかに方法論的な含意を持つ。すなわち実証主義者は量的な方法に特権を与え、他方、解釈主義者は質的な方法に特権を与える（Furlong and Marsh 2010 :184-6）。

2.2. 存在論と認識論の多様な立場

ファーロングとマーシュは、存在論と認識論に関連する立場のアウトラインを描いているが、その際、様々な立場の包括的な区別、すなわち 基礎づけ主義・客観主義・実在論と反基礎づけ主義・構成主義・相対主義の区別から始めている。

基礎づけ主義は、しばしば客観主義とか実在論とかの術語が当てられるが、このパースペクティブでは、現実世界は観察者・ 研究者の知識から独立して存在する。ただし、認識論レベルでは実証主義者と実在論者の間には重大な差異がある。両者は、独立の因果力を伴う現実世界が存在するという 基礎づけ主義の立場を共有するが、認識論的実在論者は、現実世界における何らかの構造・制度 の因果力の解釈において理論が演じる役割を強調する。すなわち行為に対する現実世界の影響はアイディアによって媒介されるとするのである（Furlong and Marsh 2010:188-90）。

これと対照的に、反基礎づけ主義・ 構成主義・相対主義は、より多様性があるが、その立場にはいくつかの共通の特徴があり、ギューバとリンカーンは、それについて以下のように述べている（Guba and Lincoln1994:110）。現実は、発見されるのではなく、むしろ積極的に構築さ

れるのである。それゆえ構築物は現実の存在論的な要素である。このパースペクティブからすれば、何が合理的であるかを決定するのはアクターであり彼／彼女の価値観である。またいかなるアクターも客観的ではありえず、あるいは価値自由のアクターではありえない。このように、全体として現実は社会的に構成されるが、その世界を構築しまたそれについて熟考するのは個人であり、そこではものの見方は社会的、政治的、文化的プロセスによって形成される（Furlong and Marsh 2010:190）。

ただし、ファーロングとマーシュは、反基礎づけ主義を理解する際のひとつの注意点を強調している。彼らによれば、われわれの知識から独立した現実世界は存在しないと論じる反基礎づけ主義者の主張は限定的に捉えられなければならない。すなわち、反基礎づけ主義の研究者は、テーブル・山・制度などが存在することを認識しない、と主張しているのではない。そうではなく、彼らは、「現実」は、それに関するエージェント、集団、社会の理解から独立した因果的な力を持っているのではないと主張しているのである（Furlong and Marsh 2010:191）。

つぎに認識論的立場の区別を吟味する（Furlong and Marsh 2010:191-3）。認識論的立場に関しては、それらを分類する多様な方法があり、さらに分類する最良な方法に関する合意は少ない。最も普通の分類は、おそらく科学的（ときに実証主義的）立場と解釈学的（hermeneutic）（あるいは解釈主義的（interpretivist））立場の区別である（Furlong and Marsh 2010:191）。

まず、社会科学の発展は、その名称が含意するように、科学的理解の特性に関する考えによって影響を受けた。とくに「経験主義的」（empiricist）伝統は、直接的な経験を基礎に、物理的現象の間の関係について一般化を発展させる。その狙いは、一定の条件のセットのもとで、規則的で予測可能な帰結があることを特定化する因果的な言明を発展させることである（これについては Hollis and Smith1991, Chapter3 を見よ）。この科学的伝統への支持者は、社会科学を自然科学と同様なものと見た。存在論的には、彼らは基礎づけ主義者である。すなわち、彼らは、行為主体（agent）にとって外部に現実世界があると考えた。彼らの焦点は社会行動の「原因」の同定にあり、「説明」を強調し、そして当初多くの人々は、厳密な科学的方法の使用によって社会科学者が、時間と空間を超えて妥当する科学的法則に類似した法則を発展させることを可能になるだろうと考えた（Furlong and Marsh 2010:191-2）。

これと対照的な解釈学的あるいは解釈主義的伝統の支持者は、世界は社会的に構築されていると信じる反基礎づけ主義者である。彼らは行動の「意味」（meaning）に焦点を当て、「説明」よりも「理解」を強調する。理解は、社会行為の理由として推論（reasoning）や意図に関係する。この伝統では、社会現象は自然科学の現象と同じ種類の観察に服してはいないゆえに、時間と空間を超えて妥当する現象の間の因果的関係を確立することは不可能とされる（Furlong and Marsh 2010:192）。

基礎づけ主義の認識論は、実証主義と実在論に分類される。実証主義者は、社会現象相互間の因果関係の確立に関心を持ち、説明的そして予測的モデルを発展させる。これに対して、実在論者は、広い意味での同じ存在論的立場を共有するが、実証主義者とは異なって、直接の観察を優先させたり（privilege）はしない。実在論者は、直接に観察できないが、行動の説明の

ためには決定的な社会現象の相互間に深い構造的な関係があると信じている。例えば、ある実在論者なら、ひとつの構造としての家父長制は、その多くの帰結を見ることができるけれども、直接には観察することができないと論じるかもしれない（Furlong and Marsh 2010:192）。

また、先に示唆したように、認識論は方法論的な含意を持つ。因果関係に対する実証主義的見方は、定量的分析を選好する傾向があり、「客観的」で一般化しうる発見を生み出したいと望む。これに対して、解釈主義的な伝統の上に立つ研究者は、説明ではなくて理解に関心があり、行為がエージェントに対して持つ意味に焦点を当て、定性的証拠を用いる傾向があり、社会現象の間の関係についてのひとつの解釈として結果を提示する。他方、実在論は、このように分類するのがそれほど容易ではない。実在論者は因果関係を探求するが、社会現象の間の多くの重要な関係は観察することができないと論じる。これが意味するのは、これらが定量的および定性的データを利用するかもしれないということである。定量的データは、直接に観察できる関係に対して適切であるにすぎないだろう。対照的に、観察できない関係は間接的に確認されるだけである。すなわち、われわれは、観察できない先行関係（pre-relationship）の結果であると、われわれの理論によって論じられる関係を観察することができる、と主張されるのである（Furlong and Marsh 2010:193）。第 1 節で論じた「論証力においては他の推論に比べて劣るが、拡張的機能においては最も優れた推論である」アブダクション（あるいは リトロダクション）が（批判的）実在論の 特徴的なリサーチ戦略あることはこのことからも理解しやすいといえよう。

2.3. 存在論および認識論に対する異なるアプローチを吟味する

ファーロングとマーシュは、存在論および認識論に対する異なるアプローチ、すなわち実証主義的、解釈主義的および実在論的アプローチを詳細に吟味する。彼らは、この吟味を、各立場に対する主な批判、各立場内の多様性、各立場が時の経過とともに変化した仕方、の 3 点に焦点を合わせて行っている（Furlong and Marsh 2010 : 193）。ここでは、できるだけ既述の内容との重複を避け、簡略して述べていきたい。

2.3.1. 実証主義的立場

実証主義に対する批判は 2 つの幅広い形態をとる（Furlong and Marsh 2010 : 193-9）。批判の第 1 のラインは、広く科学の方法に従う点で、実証主義は、科学が実際にどのように進行するかを間違って解釈していると論じる。議論の 2 つの流れがここで特に重要である。第 1 に、実証主義に対する 2 つの決定的な批判を展開したクウィーン（Quine 1961）のプラグマティストの立場がある。(i) クウィーンは、われわれが五感から導き出す知識は、それを分析するために使用する概念によって媒介されている。それゆえ、経験を解釈することなく経験を分類したり記述するいかなる方法もないと論じる。(ii) これが意味するのは、理論と経験は簡単に分離できるものではなく、むしろ理論は、われわれが焦点を当てる事実と、それをどのように解釈するかに影響を及ぼす、というのである。このことは、観察だけが理論を反証するのに役立

つという観念を掘り崩す（Furlong and Marsh 2010:193-5）。

第１の批判の２番目の流れは、ある一定時点で、科学は、問題視されない特定のパラダイムによって支配される傾向がある、というクーン（Kuhn 1970）の見解に関連する。この議論にしたがえば、科学的研究は、実証主義が含意するように「開かれている」のではなく、むしろ一定の結論はほとんど思考の範囲外なのである。多くの観察が勇敢な科学者に支配的なパラダイムに疑念を抱かせるパラダイムシフト起こる時まで、ほとんどの場合科学者はそのパラダイムを確証する結果に適合しない観察を棄却する（これは上述のクイーンの第２の批判に明らかに適合する）（Furlong and Marsh 2010 : 196）。

実証主義に対する批判の第２のラインは、社会科学に特有なものである。その批判は、社会現象と物理的あるいは自然現象の間には（社会科学を「不可能に」するような）明らかな相違があると主張する。３つの相違が特に重要である。第１に、社会構造は、自然の構造とは異なって、それらが形成する活動から独立しては存在しない。第２に、関連する社会構造は、自然構造とは異なって、エージェントが何の行為をしているかについての彼／彼女の見方から独立しては存在しない。人々は行為について反省し、その反省に照らしてその行為を変えるのである。このことはわれわれを第３の相違に導く。社会構造は、自然の構造とは異なって、エージェントの行為の結果として変化する。つまり社会的世界は時間と空間を通して多様に変化するのである。何人かの実証主義的社会科学者はこれらの相違を極小化する、がしかし、これらの相違が受け入れられる程度に応じて、社会科学者はより解釈主義的な認識論的立場に向かう（Furlong and Marsh 2010 : 195-6）。

多くの実証主義者は、あまりに堅固なこれらの批判を避ける。つまり、彼らは、実証的主義的なパラダイムから出てきたパズルを解こうとして、ただ経験的な仕事を続けるだけである。彼らが、他のパーステクティヴを認識する時、その認識はおざなりでありうる。このことは、解釈主義的なアプローチに対するKKV（King, Keohane, Verba1994）の取り扱いを簡単に考察することによって容易に断言できる（KKVにとっては、このアプローチは実在論を含むように見える）。ファーロングとマーシュはこの点についてインテンシブにKKVを批判しているが、その詳細についてはここでは割愛する（Furlong and Marsh 2010 : 196-7）。

しかしながら、より多くのソフィスティケートされた 実証主義者は、これらの批判に自覚的であり、その立場を意義深く変化させた。現代のその卓越した例を示すサンダース（Sanders 2010）は、実証主義が受けていた「猛烈な哲学的批判」を認める。彼は以下のように主張する。「ポスト行動論者」（ポスト実証主義者と呼ばれるかもしれない［今日の行動論者、実証主義者］――伊藤注）は、理論と観察の相互依存性を認め、規範的な問いは重要でありまた、それを経験的問いから区別することが必ずしも容易でないことを認め、さらに実証主義とは異なる他の伝統が、政治分析および社会分析において果たすキィの役割を持つことを認める。このように、ポスト実証主義は伝統的な実証主義から意義深く遠ざかった（Furlong and Marsh 2010 : 197）。

しかしながら、存在論的および認識論的問題は消滅してはいない。サンダースはやはり 実

証主義の立場から以下の 2 点を指摘する（Sanders 2019：51）。第 1 に、現代行動論者――“ポスト行動論者 ”――は、彼ら自身の理論的な主張を経験的なテストに服せしめることを選好する。彼らはまた、非経験的伝統の中で仕事をする学者は決定的な問い、つまり「あなたが間違っているかどうかをどのように知るだろうか」と問いに満足する答えを提供することができない、と疑う。第 2 に（Sanders 2010：24）、現代行動論者にとって、理論の究極なテスト試金石は、なおもそれが観察と矛盾しないかどうか――利用できる経験的な証拠と矛盾しないかどうか――である。現代の行動論者はなおも、観察は提示された理論の体系的な経験的テストを行うために利用されなければならないと主張する。しかし、既述のとおり、それは解釈主義的伝統の上にある研究者が受け入れることのできない基準である。

ただし、解釈と意味が重要であることを受け入れるサンダースの立場の他の側面はここでは重要である。そのことは実証主義と解釈主義の伝統の間の相違が融解し始めていることを示唆するかもしれない。

以上のように、実証主義は批判に応答して変化してきた。ポスト実証主義は、社会科学には唯一の方法があるだけだということを強くは主張しない。しかしながら、それはなおも、理解というより説明を、そして直接的観察の優位を強調する（Furlong and Marsh 2010 : 197-9）

2.3.2. 解釈主義的立場

解釈主義的（interpretivist）伝統においては、研究者は、世界は社会的にあるいは言説的に構成されている、それゆえ、すべての解釈主義的アプローチの独特な特徴は、多かれ少なかれ反基礎づけ主義的存在論に基づく、と主張する。彼らにとって、社会現象は、その現象の解釈から独立しては存在しないことを意味する。むしろ 直接に帰結に影響を及ぼすのはこの解釈や理解である。この理解や意味は、言説、文脈、あるいは伝統の中でのみ確定されまた理解される。したがって、われわれは言説や伝統を同定すること、そしてそれらが社会現象に結びつける解釈や意味を確定することに焦点を当てるべきである（Furlong and Marsh 2010: 199）。

この立場は明らかに方法論的な含意を持っている。社会的に構成されている世界を研究するには定量的な方法は鈍い道具であり、またミスリーディングするデータを生み出すかもしれない。これに対して、われわれは人々が世界をどのように理解するかを明らかにするのを助けるために定性的な方法――インタビュー、フォーカス･グループ、ビネット（vignette［短い事例、エピソードなど］）――を利用する必要がある。さらに、この立場は研究者の熟考を重視する。研究者は、可能な限り自己の部分性を自覚し、回答者の経験や行為についての彼らの解釈を解釈するときに、自己の可能な限りその部分性を考慮しなければならない。したがって、このパースペクティブからすれば定量的な方法はやはり鈍い道具である（Furlong and Marsh 2010 : 199-200）。

解釈主義的伝統に対する主たる批判は、驚くには当たらないが、実証主義者からやってくる――何人かの実在論者はその批判のいくつかの要素に同意するだろうけれども――。実証主義者にとって、解釈主義的伝統はたんに世界についての意見とか主観的な判断を提供するにすぎ

ない（もちろんそれは解釈主義に対するKKVの 批判の核心である）。それゆえ、彼らの知識的主張の妥当性を判断するためのいかなる基礎もない。社会の科学を熱望する実証主義者にとって、そのような研究は歴史あるいはフィクションさえに近いものであることを意味する。解釈主義的伝統の下にある誰かがこの批判に答えることは難しい、なぜなら解釈主義的伝統は全く異なる存在論的見解に基づいており、異なる認識論、また社会科学とは何かについて異なる見解を反映しているからだ。しかしながら、多くの研究者は、限られた意味であれば一般化することが可能であると信じている。おそらくより興味深いことに、ビヴィアとローズ（Bevir and Rhodes）は、後述するように、知識的主張をすることのできる基礎、ナラティヴや解釈の間の優劣を判断できる基礎を明らかにすることによって、実証主義者の批判に対して自分たちのアプローチを擁護しようと試みている（Furlong and Marsh 2010:200-1）。

ビヴィアとローズは、理解の重要性と絶対的知識の主張の不可能性を強調しつつ、限定的な客観性の観念を説明し、それを擁護する（Furlong and Marsh 2010: 202）。彼らは、「われわれは、特定の解釈が真実か虚偽かを断言するために利用できる純粋な事実にアクセスできないけれども、なおも客観性というアイディアを保持ことができる」と主張する。また彼らはリード（Reed 1993）を引用して、次のように述べる（Bevir and Rhodes 2003: 38）。

> ［慣行、伝統、およびナラティヴは］対立するパースペクティブやアプローチの主張者たちの間の合理的な討論と議論を可能とするような、取り決められたダイナミックな基準のセットを提供する。すなわち、これらの基準は、議論が真実か虚偽か、もしくは行為が正しいか間違っているか、を判断するための「埋め込まれた論拠」を提供する社会的な慣行、伝統、ナラティブに歴史的に埋め込まれているのである。

そのような基準は普遍的なもの、あるいは客観的なものというより、リードの言葉によれば、むしろそれらは「知識の主張を評価するための共有された基準である」。ビヴィアとローズは、リードと同様に、これらの慣行と伝統の中に見出される「意義ある根拠のある合理性」を認めるべきことを示唆する（Reed 1993:177）。

解釈主義的伝統には多くの変種があるが、それらはすべて反基礎づけ主義であり、実証主義に批判的である。これらの 解釈主義的アプローチは1970年代以来、いくつかの理由で［その詳細は割愛するが］、今日では広く政治学全体にその影響を見ることができるのである（Furlong and Marsh 2010: 203-4）。

2.3.3. 実在論的立場

実在論は実証主義と存在論的立場を共有するが、認識論的には現代実在論は解釈主義とより多くの共通性をもつ。古典的実在論のコアの見方は、かなり明瞭であり、またマルクスの著作に多くを負っている。すなわち、実在論者にとって、世界は、その世界についての知識から独立して存在する。存在論のタームで言えば、実在論者は、実証主義者と同じく基礎づけ主義者

であり、社会的な現象・構造は因果的な力を持ち、それゆえわれわれは因果的な言明をすることができると主張する。しかし彼らは、実証主義者と異なって、すべての社会現象、およびそれらの間の関係には直接に観察することのできない深い構造があると論じる（Hollis and Smith 1991:205-8, ・・・をみよ）。それゆえ実在論者にとってしばしば実在と外観の間の二分法が存在する。例えば、物質的現実を反映する「現実的」利益と、社会における強力な力によって操作されているかもしれない認知された利益の間には相違があると主張される（Furlong and Marsh 2010: 204）。

古典的実在論に対する批判には、異なる認識論的立場を反映する２つの種類がある。実証主義者は観察することのできない構造の存在を否定した。より重要なことに、彼らは、観察できない構造を想定することは実在論の知識主張を検証不可能、また反証不可能にすると論じた。他方、解釈主義伝統からの著者は実在論の存在論的主張を批判する。彼らの見解では、社会的行為から独立した構造は存在しないし、また行為を観察したり深い構造を推論するためのいかなる「客観的な」基礎も存在しない。それゆえ、構造が社会的行為を引き起こすという実在論者の主張は、存在論的および認識論的根拠から拒否される（Furlong and Marsh 2010: 205）。

ファーロングとマーシュの見解では、現代の実在論は解釈主義的批判によって深く影響受けてきた。とくに、この現代的批判的実在論は２つのポイントを認める。第１に、社会現象はそれについてのわれわれの解釈から独立して存在するが、それについてのわれわれの解釈・理解は、帰結に影響を及ぼす。それゆえ、構造は決定するのではなく、むしろ制約しあるいは促進する。社会科学は、構造を解釈し変化させる熟考するエージェントの研究に関わるのである。第２に、世界に関するわれわれの知識は誤りうるものである。すなわちそれは理論負荷的である。もしわれわれが社会現象の間の関係を説明しようとするなら、外的「現実」とその「現実」の社会的構築の両方を同定し理解する必要がある（Furlong and Marsh 2010: 205）。

実在論はまた、明確な方法論的含意を持つ。実在論は、実在的世界が「外部」にあることを示唆するが、その帰結は、世界がどのように社会的に構築されるによって形成されることを強調する。それゆえ、実在論は、定量的データと定性的データの両方の有用性を認める。それで、例えば、実在論者は、金融市場がどの程度「グローバル化された」かを同定するために定量的な方法を利用するかもしれない。しかしながら、彼らは、またグローバル化が政府によってどのように認識されるか、あるいはどのように言説的に構築されたかを定性的に分析したいと思うであろう。なぜなら、実在論の議論では、「現実」および言説的構築が、グローバルな圧力に反応して政府が何をするかに影響を及ぼすからである（Furlong and Marsh 2010: 205）。

それで現代の実在論は、一方で因果的な説明、およびとくに観察できない構造の因果力への関与を保持しながら、解釈主義的批判の多くを認めようとする。もちろんここでキィとなる問題は、科学的立場と解釈的立場を結合することは容易でないことであり、実際多くの人がそれを不可能だと見るであろう。なぜならこれらの２つの立場は、一方は説明に焦点を当て、他方は理解に焦点を当てるというように、基本的にきわめて異なる存在論的および認識論的土台をもっているからである（この点については、Holllis and Smith 1990:212）（Furlong and Marsh

2010: 205)。ここでは、このイシュウはいわゆる「構造 - エージェンシー問題」に関わることを付言するにとどめておく（Grix 2010:48-50　ほか)。

ファーロングとマーシュは、この「政治学における存在論と認識論」に関する論稿を結ぶにあたり以下のように述べている。すなわち、すべての人が受け入れるような形で存在論的および認識論的論争を解決することは不可能であり、また、利用できるすべての立場の統合を発見しようと試みることは魅力的だが、これもほとんど不可能である。それらのイシュウは、おもに社会における人間行為の適切な範囲についての不一致を反映する、深い根を持つ道徳的立場に関連する問題であるからである。

さらに リスク回避的の研究者はこのイシュウを避けるという戦略に魅力を感じるかもしれないが、この立場は安全どころか実際はその正反対である。なぜならそれは良き研究と悪しき研究そして良き議論と悪しき議論の間の区別を可能にしないからである。このイシュウに取り組むことはきわめて重要なので、それには様々な議論を個々に考え抜き、それらを比較し、評価することが必要である。

これらのことが意味するのは、すべての研究者は、①自分たちの認識論的および存在論的土台、また②それらの土台がリサーチ・デザインとリサーチ方法にどのように影響を及ぼすか、そして最も重要なことだが ③リサーチが明らかにするものを基礎としてなされる主張にどのように影響を及ぼすか、を同定し認識しなければならないということである（Furlong and Marsh 2010:209-10)。

むすび

本研究ノートの目的は、わが国の社会科学、とくに 政治学において、科学哲学的基礎に対する関心が薄いという空隙を少しでも埋めることであった。そのために、第１節で リサーチ・デザインの コアの部分を概略し、そこでリサーチ戦略とリサーチ・パラダイムを位置づけ、第２節で科学哲学的基礎に焦点を置きながらリサーチ・パラダイムについて概略した。リサーチ・デザインは、リサーチの遂行を首尾よく制御するための必要であり、また リサーチの科学哲学的基礎を意識することは、社会科学一般、また政治学の知識をより確かなものにし、さらに拡張するためにきわめて重要であると考えられる。

＜引用・参考文献＞

Bhaskar, R.（1979）*The Possibility of Naturalism: A Philosophical Critique of the Contemporary Human Science*.（Brighton: Harvesrer）.

Bevir, M. and Rhodes R.（2002）'Interpretive Theory', in D. Marsh and G. Stoker（eds）*Theory and Methods in Political Science*, 2nd edn（Basingstoke: Palgrave Macmillan）131-52.

Bevir, M. and Rhodes R.（2003）*Interpreting British Governance*（London: Routledge）

Blaikie, N.（2007）*Designing Social Research: Advancing Knowledge*, 2nd edn（Polity Cambridge）

Blaikie, N.（2010）*Designing Social Research: The Logic of Anticipation*, 2nd edn（Polity Cambridge）

Bulmer（1986）*Social Science and Social Policy*（London: Allen and Unwin）.

Furlong and Marsh（2010）'A Skin not a Sweater: Ontology and Epistemology in Political Science' in D. Marsh and G. Stoker（eds）*Theory and Methods in Political Science*, 3rd edn（Basingstoke: Palgrave Macmillan）184-211.

Giddens, A.（1976）*New Rules of Sociological Method*（London: Hutchinson）.

Grix, J.（2010）The Foundation of Research, 2nd edn（Palgrave Macmillan）

Guba, E. and Lincoln, Y.（1994）Competing Paradigms in Qualitative Research', in N. Denzin and Y. Lincoln, *Handbook of Qualitative Research*（Thousand Oaks, CA: Sage）105-17.

Hempel（1966）*Philosophy of Natural Science*, Princeton（Hall, Inc., Englewood Cliffs, N.Y）.

Hollis, M. and Smith, S.（1991）*Explaining and Understanding in International Relations*（Oxford: Clarendon Press）.

King, G., Keohane, R. O. and Verba, S.（1994）Designing Social Enquiry: Scientific Inference in Qualitative Research（Princeton, NJ: Princeton University Press）.

Kuhn, T.（1970）The Structure of Scientific Revolution（Chicago, II: University of Chicago Press）.

野村康（2017/2021）『社会科学の考え方―― 認識論、リサーチ・デザイン、手法』（名古屋大学出版会）

Popper, Karl R.（1959）*The Logic of Scientific Discovery,* Hutchinson & Co., London,

Quine, W.（1961）*From a Logical Point of View*（New York: Harper & Row）.

Reed, M.（1993）'Organization and Modernity', in Hassard and M. Parker（eds）, *Postmodern and Organizations*（London: Sage）168-82.

Sanders, D.（2010）'Behavioral Analysis', in D. Marsh and G. Stoker（eds）*Theory and Methods in Political Science*, 3rd edn（Basingstoke: Palgrave Macmillan）23-41.

Taylor, C.（1964）*The Explanation of Behaviour*（London: Routledge and Kegan Paul）.

米盛裕二（2007）,『アブダクション―― 仮説と発見の論理』勁草書房